

ミネアに続き、ディルが出逢った女性マーニャ。

ディルの心の奥底に潜む「暗闇」に気づいたマーニャは、彼女なりのやり方で、ディルの心を解きほぐそうとする。

白いワンピースを身にまとい、マーニャの化粧テクニックによって、妖精のような美少女へと生まれ変わったディル。そしてその心もまた

「少しずつ『自分だけのもの』を見つけていけばいいんだよ」

マーニャの優しい言葉に、少しずつ明るさを取り戻して行くのだった。

しかし、酒場へと出かける直前、ミネアの占いに出たディルの「すぐ先の未来」は

「『^{タワー}塔』 その暗示は『旅の中止』『突発的なトラブル』」

「『すぐ先の未来』って言ったね。それじゃあ、もしかしたら、酒場で」

「可能性は高いと思うわ」

ディルと姉妹を酒場で待ち受ける物とは、一体何なのであろうか？

ドラゴンクエスト4 移植記念二次創作小説

「私の中の炎」

～ エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第5章より～

第3話 「本当に、つらかったんだね」

あさづけ兄貴

ギイイイイ。

酒場の扉を開ける。

先ほど、カジノへマーニャを迎えに行った時に続き、今日二度目の酒場である。

「こんちわ～」

マーニャを先頭に、カジノへと続く下り階段ではなく、カウンターの方へ入って行く。

この時

「　　？」

ディルは、かすかな違和感を感じた。

タバコの煙でむせ返るようだった先ほどに比べて、妙に「空気がいい」のだ。

だが、それがなぜかは、その時のディルには分からなかった　　。

カウンター近くの丸テーブルに座る。

「いらっしゃい」

程なく、半袖の襟つきシャツに身を包んだ、口ひげをたくわえた屈強そうな男が、にこやかな顔で、テーブルに寄ってきた。

この店の^{マスター}主人である。

「おやお姉さん、珍しいね。今日は下じゃないのかい？」

マーニャの顔を見て、渋い低音の声で言う。

じろりと、ミネアがマーニャを睨む。

「や、やだなあマスター、人間きの悪い事言わないでよ」

引きつった笑いを浮かべながら、両掌をひらひらと振り、マーニャが否定する。

「はっはっは　さて、ご注文は何にするね？」

「^{ビール}麦酒を3つ。あと何か肴のいいところを見繕ってよ」

「はいよ、^{ビール}麦酒3つね　そっちのちっこいお嬢ちゃんも^{ビール}麦酒かい？」

「え？ あの　　」

ディルよりも早く、マーニャが言う。

「この子にお酒の味を教えてあげようと思ってね」

「なるほど、そういうことなら　^{ビール}麦酒3つ、と」

^{マスター}主人は、腰に下げていた紙束に、注文を書き込むと、カウンターの奥に消えていった。

「あの、私、お酒って飲んだことなくて　　」

^{マスター}主人が去った後、消え入りそうな声で、ディルが言った。

「なーに、だいじょぶだいじょぶ。誰にも初めてのときがあるって」

マーニャが笑顔で答えた。

「は、はあ　　」

そうこうしているうちに、主人は、なみなみと麦酒の注がれたジョッキを2つと、小さなグラスを1つ、持ってきた。

「はいお待ちどおさま。麦酒を2つとお嬢ちゃんは、最初は味見程度がいいだろう構わんね？」

「マスターの言う通りにしたら？」

ミネアが微笑みながら、ジョッキを手取る。

「まあ、マスターがそう言うなら、いいか」

マーニャも苦笑して、ジョッキを受け取った。

マスターがいつのまにか、手に麦酒の瓶を持っていた。

「さあお嬢ちゃん、グラスを持っとくれ」

「は、はい」

ディルの持ったグラスに、3分の2ほど、麦酒を注ぐ。

深い黄金色と白い泡のコントラストが美しい。

「こほん」

マーニャが、軽く咳払いなんぞしながら、ジョッキを手にする。

「それでは、僭越ながら、ワタクシめが乾杯の音頭を」

ジョッキを両手で胸の前に持ち、にっこりと微笑んでいるミネア。

ディルも、手に持ったグラスを、胸の前で構える。

「それじゃ、<勇者>ディルとあたしたちの出会いを祝って、そしてあたしたちの前途に幸せがある事を祈って」

一瞬間を置いて、マーニャはジョッキを差し出した。

「乾杯！」

マーニャの音頭で、2つのジョッキと1つのグラスがぶつかる。

かちゃん、と、快い音。

んぐっ　んぐっ　んぐっ

マーニャが、ジョッキの中身をみるみる飲み干していく。

たんっ！

「ぷはーっ！ この一杯のために生きてるわ〜！」

「もう、姉さんたら。はしたないわよ」

ミネアも、ジョッキを両手で持ち、上品に^{エール}麦酒を飲んでいて。

一方、

「　　」

じっとグラスの中身を見つめるディル。

マーニャも、ミネアも、あんなに美味しそうに飲んでいる。

「　　よし！」

くびっ。

ディルは、意を決し、グラスの中の液体を一口、口に入れた。

その瞬間

「！」

ディルの舌から、全神経に、ホップの苦みが駆け抜けた！

「に、苦〜い！！」

顔をしかめ、舌を出して、ディルは叫んだ。

「そりゃーそうよ、^{エール}麦酒ってのは苦くなきゃ美味しくないじゃん」

「でも、最初はやっぱり、抵抗あるわよね」

ミネアが助け船を出す。

すると、そこに

「はっはっは、そっちのオレンジ色の服のお姉さんの言う通りだな」

^{マスター}主人が、片手に、茶色い物が山盛りになった皿を乗せて、再びやってきた。

「そんなお嬢ちゃんに、いいことを教えてあげよう。ちょっとそのグラスを貸してくれんかね」

「　　？」

テーブルに皿を置き、ディルが差し出したグラスを受け取った^{マスター}主人は、もう片方の手に

持っていたある物をディルに見せた。

「レモン ？」

それは、半分に切ったレモンだった。

「そう。こいつを ？」

ぎゅっ。

主人のごつい手の中で、歪んで形を変えたレモンから、うす黄色の果汁がほとぼしり、グラスに注がれた^{エール}麦酒の黄金の水面に次々と落ちていく。

「ほら、これでどうだい？」

主人はそう言って、ディルにグラスを返した。

じーっ。

グラスを見つめるディル。

さすがに泡はだいぶ消えてしまっていたが、それ以外は、あまり変わらないように見える。

くんくん。

匂いをかいで見る。

かすかにレモンの香りがした。

「 よし！」

再び意を決して、ディルは一口、グラスの中身を飲んだ。

「あ ？」

ディルは、心底驚いた顔をした。

確かに、苦みを感じないわけではない。が、レモンの酸味と香りで、先程ほどきつくは感じなくなっている。

「飲みやすくなってる ？」

「どれどれ？」

マーニャが、横からディルのグラスをかすめ取り、一口飲む。

「ほんとだ！ 美味しい！」

「どうだい。^{エール}麦酒が苦手な若いお嬢さんのために考えたんだが」

「これはいいよ。あたしも今度からこれにしよ」

「ははは、じゃあ、レモンをあと2～3個切ってくるでしょうか　そうそう」

主人は、自慢のアイデアが好評だったのに気を良くしたのか、嬉々としてカウンターに引き上げようとして、途中で言った。

「その腸詰め、今日薫煙した出来立てのやつだ。冷めないうちにやってくれや」

「おお、腸詰め腸詰め　やっぱ麦酒にはこれよね～」

先ほどの皿の中身　腸詰めを手でつまみ、かじるマーニャ。
続けてビールを一飲み。

「く～、これよこれ！」

「姉さん、はしたないってば」

*

「あの　」

突然、ディルが切り出した。

「なに、ディル？」

「ひとつ、聞きたいことがあるんです」

真剣な瞳。

マーニャは、腸詰めとジョッキを　ミネアもジョッキをテーブルに置き、ディルの方
に向き直った。

「なんだい？　何でも聞いてごらん」

「分かる事だったら、できるだけ答えるわ」

二人が、軽く微笑みながら言った。

「あの　私のことを<勇者>って呼んでますよね。<勇者>って　何ですか？」

「え？」

「あ　」

マーニャとミネアは、互いの顔を見合わせた。

「そっか　ディル本人はまだ知らないんだ　」

「全然説明してなかったわね」

「失敗だったなあ　」

そして、改めてディルの方に向き直り、言った。

「じゃあ、それについて話すよ　　だけど、この話は、ちょっと長くなると思うんだ。
なぜなら　この話は、あたしたちが旅を始めた、その理由にもつながる話だから」
マーニャが言う。

「それに、もしかしたら、あんたの身の上で起こった事に関係ある事も、話の中には
あるかもしれない。あたしたちもディルも、すごくつらくなるかも知れないんだ」

「私たちは、貴方が私たちを導く者だと　　<勇者>だと信じているわ」

マーニャに続き、ミネアが言った。

「でも私たち、本当は、貴方がなぜ<勇者>なのか知らないのよ。できればそれを
知りたい　　そうすれば、私たちがここにいる理由が、私たちにも納得できるから」

「ディル、だから、あたしたちからも、あなたにお願い。あたしたちがこれから、
自分の事を話している時に、もし自分の身の上で心当たりがあったら、それを
あたしたちに話して欲しい、って」

「それはとてもつらいことだと思うわ。　　でも、そうしない限り、貴方も、
私たちも、前に進めない　　これは大切なことなのよ」

「だからディル　　あなたのつらさを半分、あたしたちに分けてくれるつもりで
構わない。教えてちょうだい、あなたのつらさを」

「　　」

ディルは、目を伏せた。

飲みかけの麦酒の水面に、ディルの顔が映って　　底から立ち上る泡で、その姿が小さく歪む。

少しの沈黙の後。

ディルは顔を上げた。そして、はっきりと言った。

「わかりました。思いついた事は何でも話します。　　どんなにつらくても、話します」

「　　！」

マーニャとミネアが、笑顔で顔を見合わせる。そしてディルに言った。

「そう　　。話してくれるのね　　ありがとう。ディル」

「偉いよ、良く決心してくれたね」

マーニャがまた、ディルの頭を、くしゃくしゃっ、と撫でた。

*

「簡単に言うと、あたしたちが旅をしてるのは、仇討ちのためなんだ」

「仇 討ち ？」

「そう。私たちは、お父様を殺した男を追っているの」

「マーニャさんとミネアさんのお父さんを 殺した男 」

「そう。父さんの弟子でありながら、父さんを殺し、その研究を盗んで逃げた
最低の野郎さ」

「たとえ10年たっても100年たっても、私は そして姉さんも、あいつだけは
許せない 絶対に」

「バルザック！ あいつが！」

「そう、バルザック。それがその仇の名前」

「 」

ディルは、マーニャとミネアが、今までに聞いたことのない口調で怒りをあらわにするの
の聞き 圧倒されていた。

「ディルにも分かるように、最初から話すわ。私たちは、ここからずっと南東
モンバーバラ大陸のコーミズって村で生まれたの」

「あたしとミネアの父さん エドガンって言うんだけど、父さんはモンバーバラ大陸
では少しは名の通った^{アルケミスト}錬金術師だったんだ」

「お父様は、村の西の小さな洞窟に研究室をつくって、そこでいろんな研究をしていた
のよ」

ディルは、身じろぎせず聞いていた。

「私たちはとても幸せだったわ あの日は」

「そう。あの日 父さんは、とんでもない物を見つけてしまった 」

「とんでもない物 ？」

「いや、実は、あたしもよく分かってないんだけどね」

「じゃあ、私が話すわ」

ばつの悪そうに頭をかくマーニャを、ミネアが制して言った。

「お父様は、偶然見つけてしまったの。ものすごく強い魔力を人間の肉体そのものに直接作用させれば、人間でない生き物、人間を超えた生き物を作り出せる、ってことを。そしてその方法を」

「父さんは、魔力で体細胞の遺伝子を一気に書き換える、とか何とか言ってたけどやっぱ、あたしには、何の事だかさっぱり分かんないや」

「お父様は、その方法を ^{セクレト・デ・エボルシオン} <進化の秘法> って呼んでいたわ」

「^{セクレト・デ・エボルシオン} 進化の秘法 」

ディルは息を呑んだ。

明らかに、自分の想像の及ぶ範囲を超えた概念だった。

しかし、その語感には 何か、とてつもなく邪悪な物が、ディルには感じられた。

「お父様は、その ^{セクレト・デ・エボルシオン} <進化の秘法> を、人間を誤った方向に導くものだと思って、封印しようとしたの。だけど 」

「あいつが バルザックの野郎が 」

つらそうなマーニャ。

「あいつが、父さんを殺して ^{セクレト・デ・エボルシオン} <進化の秘法> を記した資料を持って、行方をくらましたんだ 」

歯を食いしばるマーニャを、ディルはじっと見ていた。

その姿を、見なければならぬと思っていた。

脳裏に焼きつけておかなければならぬと思っていた。

「私たちは、その後、バルザックを追って、旅を始めたの まずは、すぐ南にあるモンバーバラの町に行って、私は ^{フォーチュンテラー} 占い師 を、姉さんは ^{ダンサー} 踊り子を始めたわ」

「どっちも、いろいろな人の噂が聞ける商売だからね」

「そうしたら、しばらくして、南のキングレオって国の大臣が変わって その直後に王様がおかしくなり始めた、って噂が流れてきたの。全く外に出なくなると突然、税金がきつくなったり、港が閉鎖されたり とか」

「やる事なす事、メチャクチャだって言うのさ。 いや、それよりも、その大臣だ」

「そう、その新しい大臣の名前が バルザック、だったのよ」

「それじゃあ 」

「ええ。恐らくは、その大臣こそは、あの憎いバルザック その王様がおかしくなったのも、バルザックのせい そしてそれは、もしかしたら ^{セクレト・デ・エボルシオン} <進化の秘法> と

関係があるのかも 私たちはそう思ったわ」
「だから、あたしたちは、キングレオ城に行った オーリンと一緒にね」

「オーリン？」

「お父様には、バルザックのほかに、もう一人弟子がいたの。それがオーリン」
「まじめで、頼りになる男^{ひと}だったよ 結婚するにはいいタイプかな、なんて思ってた」
「オーリンも、仇討ちを手伝うって言ってくれたの。それで、一緒にキングレオ城に行って 」

二人の顔が、同時に、悲しみに沈んだ。

「あそこで あたしたちをかばって、オーリンは 」

「 」

「バルザックは、半分^{モンスター}化物になっていたわ 多分^{セクレト・デ・エボルシオン}<進化の秘法>を使って。でも、
私たちは彼を倒した はずだったの」
「あいつは、最後の力で、逃げたんだ 自分の主のところに」

「主、って ？」

「正真正銘の^{モンスター}化物さ」
マーニャは吐き捨てるように言った。

「6本の腕を持つ獅子 そんな奴に、あいつは^{かしず}傳^{つた}いてた 」
「最初は、姿を変えた王様かと思っていたの。でも 違ったわ。人間とは根本的に
異質なものだったの」
「^{モンスター}化物は名乗った 我こそはキングレオ、って。『我こそは』だってさ 完全に
王様気どりってわけだ」
「多分、王様を殺して、入れ替わったのでしょうね」

「 」

「私たちはキングレオを倒そうと思った でも、かなわなかったの」
「強かった 今思い出しても身の毛がよだつぐらい 」
「そして、最後に、ボロボロになった私たち二人にとどめを刺そうと、キングレオが
火を吐いた時、オーリンが私たちをかばうように、前に 」

ミネアの瞳に、涙が光った。

「次に気がついた時、あたしたちは牢屋の中だった。あいつにとっ捕まっていたんだ
多分、後で処刑するつもりだったんだろうね」

「オーリンはいなかった　私たちだけだったの。多分、あの時　」

悲痛な沈黙。

「でも　そこにいた爺さんが、これをくれたんだ」

マーニャが、手に提げていたポーチから、小さな紙切れを出した。

「これは　？」

「ハバリア　ああ、キングレオの城から少し離れたところにハバリアって港町が
あるんだけど、そこからエンドールへ行く船の乗船券。正確にはその半券さ」

「そのお爺さんも、キングレオに逆らって捕まっていたらしいの。自分はもうだめ
だから、自分の志を継いで欲しい、って、これを私たちにくれて　私たちが牢屋
から逃がしてくれたの」

実は、その老人こそが、キングレオと名乗る^{モンスター}化物に城を追われた、本来のキングレオ王
その人であったのだが　姉妹はそのことを知らない。

「ハバリアの港が、あの^{モンスター}化物の命令で閉鎖されることになって、その時に出た船が
最後の定期便　あれが、ラストチャンスだったんだ」

「この乗船券は、私たちの命　だからこうして、今も肌身離さず持っている
のよね、姉さん？」

「そういうこと。あの時の感謝と　悔しさを忘れないためにね」

「あのお爺さんは、命の恩人。でも、彼も、今はきっと　」

「　」

ディルには、何も言えなかった。

あまりに、あまりに悲しい物語だった。

もちろん、ディル自身に起きた悲劇も、大きな物であった。が、この姉妹の身に起きた
出来事も、それと同等の悲劇であった事を、ディルは理解した。

しかも、そんな事があってもなお、マーニャはあの明るさを、ミネアはあの優しさを、
それぞれ保ち続けているのだ。

それは間違いなく、彼女達の「強さ」に他ならないのである。

ディルもまた、涙を流していた。

*

「と、いうわけで」

マーニャが、それまでのムードを振り払うように、わざと明るく言った。

「ここまでが、あたしたちの話。そしてここからが ディル、あんたに関係する話」

「私に 関係する話 」

「そ」

マーニャが続けた。

「あの時 牢屋から逃げて、あたしたちは大急ぎでハバリアに向かった 船に
乗るためにね」

「その途中に 海岸に、小さなお告げ所が立っていたの」

「そこに寄って、休ませてもらおう、って ミネアが言ったんだ。急ぎの旅で疲れも
溜まってたし、ちょうどいいかな、ってあたしも思った」

「そして、そこで、私たちの行く末に関して、^{オラクル}神託をもらったのよ」

「まあ、占いみたいなもんだね。そこの^{シスター}修道女さんが、神様のお告げが聞こえる、って
言うんで、聞いたもらったってわけ」

「私は ^{フォーチュンテラー}占い師 は、自分のことを占ってはいけない、っていう決まりになっ
ている。だから 」

「肝心な時に使えないのよね、^{ミネア}この子」

「しかたないでしょ、^{コマンドメント}戒律 破ると厳しいんだから」

真剣に責める風ではない、茶化した拍子で、マーニャが言う。ミネアもやんわりと返し
た。

本当に、心の底まで理解しあっている そんな会話だ、と、ディルは思った。

「ごめんね、話がそれてしまって 私たちは、少しでも未来についての情報が
欲しかったから ^{オラクル}神託を聞いたの」

「あの言葉 忘れようと思っても忘れられないよ」

「そうね ディル、私たちのもらった^{オラクル}神託は、こんな言葉だったの。

『あなた方は、やがてこの世の暗雲を払う光と出会います。その光は小さく、
消えそうだけれども決して消える事はない。

そして、その光に導かれ、その光を守る、別の7つの光が現われる 。

あなた方は、7つの光のうちの2つになるのです。そしてこの世を救う光を「勇者」を探し、守りなさい。それがあなた方の使命なのです』

そう、こんな」

『勇者』 『この世を救う光』」

ディルが、その言葉をゆっくりと反芻する。

「最初は、あたしたちも、何の事なのかさっぱりわからなかった だけど、この街に、
<世界の都>エンドールに行けば、何か分かるかもしれない。そう思ったんだ」
「そして」

ミネアが、ディルの瞳をまっすぐ見つめた。

「ディル、貴方に出逢ったの」

間を置いて、ミネアは続けた。

「最初は『泣いている子がいるから、助けてあげたい』って、それしか思わなかった。
だけど、水晶玉に映ったのが」

「ミネアさん、あの時、『小さな光が見える』って、そして『その光を守るように、
7つの光が集まる』って そう、言っていましたよね」

「そうよ。その通り。さっき話した^{オラクル}神託と同じでしょ？」

「だから、私のことを<勇者>だって」

「そう」

ミネアは微笑んで答えた。

＊

ディルが、再び、反芻した。

「勇者 この世を救う光」

「なにか、心当たりがあるのかい？」

「私、言われたんです。お父さんに」

尋ねたマーニャに、必死に訴えるような目で、ディルは答えた。

「お前は生き残らなきゃいけない、<エスターク>を倒し、この世に平和をもたらすことができるのは、お前だけだ、って あの日、最後に、そう言われたんです」

そう言って、ディルは話し始めた。

あの平和だった村の事。

父の事、母の事、剣術を教えてくれた男性、魔法使いの老人、姉のように慕っていた少女、シンシアの事。

そして、「あの日」の事　あの悪夢を。

ディルは話した。その脳裏に刻み込まれたもの、忘れたくて仕方のないものを、意識の表に引っ張り出し、話した。

「あたし、あの時、これからどうしたらいいか、全然分からなくて　そんな時に、ミネアさんに呼び止められたんです」

「そうなの　そんな事が　」

「つらかったんだね　本当に、つらかったんだね　」

姉妹の目は、潤んでいた。

姉妹もまた、自分たちが味わった悲劇に匹敵するものを、目の前の小柄な少女が味わっていたとは、思っていなかったのである。

「でも、偉いよディル。良くそんなつらい事を話してくれたね　偉いよ」

マーニャが、また、ディルの頭を撫でた。

その温かい手の感触が、ディルには、心地よく思っていた。

その時、マーニャが、ディルの頭を撫でながら、ガラガラの周囲の席をさっと見回し、部屋の端のテーブルで呑んでいた三人組のほうをちらっと見て　主人と何か目で合図を送り合っていた事に、ディルも、そしてミネアも、気がつかなかった。

*

「でも、エスターク　聞いたことのない名前ね」

「そうだね、あたしも」

「なんでも、『地獄の帝王』なんだそうです」

「地獄の　帝王　？」

ミネアが考え込む。

「なんか、心当たりあるのかい？」

「いや、心当たりってほどの物じゃないけれど　アッテムトっていう街があるでしょ、姉さん」

「ああ、あの鉱山のある　　」

「そうそう。昔、そこから来たっていう子供のために、占いをした事があるの」

ミネアは、真剣な表情で話し始めた。

「占い自体は、財布をどこで落としたか知りたい、っていう、よくあるものだったわ。でも、その時、その子が言ったのよ。『鉱山の穴の奥は地獄とつながっていて、子供が近づくと地獄の帝王に食べられちゃうんだ、だから近づいちゃダメだ、ってママに言われた』って」

「へえ、そんなことがあったんだ。初耳だよ」

「もしかして、それって　　」

思わず身を乗り出すディルのおでこを、人差し指で「ちょん」とつつき、ミネアは苦笑しつつ言った。

「焦らないの。私自身は、この話はその『エスターク』にはあまり関係ないと思って
いるわ。きっと、その子のお母さんが、子供を鉱山に近づけたくなくて、そう言った
のよ」

「鉱山は危ないからね。訳のわからない毒ガスやら毒の水やらがたくさん出てくるん
だろ？」

「そう。それに、子供が中で迷子にならないとも限らないしね」

「なぁんだ、違うのか　　」

「ごめんねディル。でも、一応、頭の片隅に入れておいてもらった方がいいと思った
から。それに　　」

「それに？」

「バルザックやキングレオ。仮に、彼らを束ねている者がいたとしたら？ あのキング
レオより強いとしたら、それこそ、『地獄の帝王』ぐらい名乗ってもおかしくない
かな、って」

ぼん。

マーニャが、膝を打った。

「そいつが、そのエスタークかもしれない、ってわけか　　。なるほど、さすがだね
ミネア」

「ふいふ」

ミネアは、いつもの微笑みを見せたが、すぐ真剣な顔に戻った。

「でも、だとしたら、そのエスタークって、半端じゃなく強いわよ」

「確かに、一筋縄じゃ行かなさそうな相手だね。でも、そんなのを倒せるっていうんだから。」

マーニャは、きょとんとした目で彼女を見つめるディルの頭の上に、また手を置いた。

「たいした子だよ、あんたは」

いづく
慈しむような瞳だった。

この時、彼女達はまだ、ミネアの聞いた子供の言葉に重要な真実が含まれていることを、知らずにいた。

そして、また、真の世界の危機をもたらす者が、エスタークではなく、それを復活させようとする者であることも、彼女達は知らずにいたのである。

*

「さて。」

ディルの頭から手を下ろすと、やおら、マーニャが立ち上がった。

「どうしたの、姉さん？」

「なんか、話してる間に^{エール}麦酒飲み過ぎちゃったらしくて、お手洗い」

「もう。」

ミネアがため息をつく。

「ごめん、すぐ帰ってくるからさ」

顔の前で手を合わせ、軽くウインクすると、脱兎のごとく、マーニャは走ってそのテーブルを去り

階下のカジノへと、降りて行った。

「あーっ！ 姉さん！」

ミネアが大声を上げた。

「？」

きょとんとしているディルに、ミネアが行った。

「やられたわ、姉さん、お手洗いに行くふりをして、カジノへ行ったのよ」

「は、はあ？」

「私としたことが、うかつだったわ　　」
ミネアは唇を噛み、ディルの方に向き直って、言った。
「ほんのちょっとだけ、ここで待っててくれる？ 連れ戻してくるわ」
「えっ？」
「すぐ戻ってくるから。ごめんね」
「えっ？ えっ？」

そう言い残すと、ミネアも、小走りに、テーブルを後にした　　。

「あの　私　置き去りですか　？」

＊

そして
この時、彼女から遠く離れた、部屋の端の席の三人組が、こっそりと席を立った。

ミネアの占い通り、トラブルが、やってくる。

(つづく)

<次回予告>

ひょんなことから一人きりになるディルを、未曾有の^{トラブル}災難が襲う！

ディル、貞操の危機！

果たして、マーニャとミネアはディルを救えるのか？

そして、戸口から彼女達を見つめるあの老人は一体　　？

「私の中の炎」第4話　「見えたかい？ あたしの中の炎」

次回、我々はマーニャの熱き魂に触れる！
